

2020年3月8日 礼拝説教要旨

詩編講解説教6「主よ、癒してください」

詩編6：2～11、マタイ8：14～17

手元にあります複数の注解書がこの詩編第6編を病いの中で神さまに救いを求める祈りであるとしています。そのことを裏付けるものとしては何より3節に「癒してください」とあります。これは具体的な病いの癒し、回復と理解することができます。また4、5節に「魂」とありますが、これはヘブライ語でネフェシュと言います。この言葉は創世記2：7「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」この「生きる」と訳された言葉がここで言う「魂」ネフェシュです。ですから「魂は恐れおののいています」「魂を助け出してください」は、命の危機を示しています。

さらに6節では「死」また「陰府」が出てきますが、詩人がその病いゆえに死を意識していることが示されます。そして7、8節にあるように、この病いの苦しみゆえに夜ごと涙を流し嘆く姿があります。「寝床が漂う」というのは、あまりにも涙を流しすぎて洪水のようになるという一つの比喻です。例えばここに「目が衰える」とありますが、「目」というのは生命力の表れです。「目力」と言います。目に力がない、目が衰えるというのは、生命力が失われていること。そしてその病いのゆえにわたしたちは老いるのです。そのように全体を見ても、ここは病いの中で祈る祈りだと捉えることができます。

人は病いを恐れます。それは人類に普遍的なことでしょう。今、まさに世界は新型コロナウイルスという新しい感染症の脅威にさらされており、この世界的な病いの蔓延が一体何を意味しているのか。もちろん医学的な見地から様々な検証がなされていかなければならないと思いますが、神学的にもその意味するところを考えていく必要があります。というのも、多くの人々は問うのです。この病いの意味は何でしょうか。これは今のコロナウイルスの問題だけではない。わたしたちはいろいろな病いに現に苦しんでいるのです。肉体的にも精神的にも。その中で時に痛みを耐えながら日々生活している。ですからこの詩人と同じ心境だと申し上げてよい。これはわたしたちの嘆きであり、涙の祈りだと言ってもよいのです。

まず2節に「主よ、怒ってわたしを責めないでください」とあります。ここで詩人は病いを神さまの怒りと結びつけています。ここは慎重にならなければならないところですが、単純に病気は神さまの怒りだと結論づけるのは早計です。ここを間違えますと、例えば昔ハンセン病は「天刑病」と呼ばれた。何か悪いことをした。だからそれは天からの刑罰だ。そういう病気の捉え方をしてしまう。でも信仰者はそのようには捉えない。この神さまの怒りは何に向かって怒っておられるのか。そこをしっかりと見極めなくてはなりません。

神さまは何に対してお怒りなのか。それは他にもないわたしたちの罪です。創世記の話では、蛇にそそのかされて木の実を食べた。そこに神さまの怒りがあらわされます。神さまとの約束よりも罪が勝ってしまったからです。そして樂園を追放されるというのは、人間が罪の支配に取り込まれてしまったこと。それは神さまとの深い断絶を意味しています。そのことを表しているのが6節にある「死の国」「陰府」という言葉です。これは神さまとの深い断絶の世界を表しています。罪を犯した人間が取り込まれてしまった世界です。そしてわたしたちの病いもまたこの死の国、陰府の中でわたしたち人間が負うべきものとなった悲しい現実なのです。です

から病気は神さまが罰として与えたのではない。人間がその罪ゆえに自ら立ち入った死の国、陰府の中で負ってしまったことなのです。そこを間違えてはならない。神さまは人間を神さまの形に造られました。そして「極めて良かった」と祝福されたのです。その祝福をわたしたちは捨てて、自ら罪の中に入り込んだ。その結果、死に至る病いを負った。このことを神さまは激しくお怒りになられているのです。

でも話はこれで終わりではありません。わたしたちは永遠に陰府に捨て置かれるのではないのです。驚くべきことに、その罪の支配、陰府から神さまはわたしたちを救い出してくださいました。そのためにイエス・キリストが救い主として与えられました。キリストが真の人としてこの世に来られ、しかも十字架におかかりになられて、わたしたちが負うべき神さまの怒り、それゆえの苦しみ、死の痛みのすべてをご自身がお受けになられたのです。ハイデルベルク信仰問答は次のように告白します。

問37「苦しみを受け」という言葉によって、あなたは何を理解しますか。答 キリストがその地上での全生涯、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた、ということです。それは、この方が唯一のいけにえとして、御自身の苦しみによってわたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してくださるためでした。

キリストのご受難は神さまの怒りをキリストがわたしたちに代わって負ってくださった出来事に他なりません。それがもっともよく現されているのが十字架の出来事です。十字架はまさに罪ゆえに神さまと断絶した世界、死の国、陰府と捉えることができます。そこにキリストは行かれた。そして十字架の上で罪に対する神さまの怒りをその身に受けてくださった。そのようにして罪の支配からわたしたちを救い出してくださいました。

聖公会の宣教師ハンナ・リデルの設立した回春病院という病院があります。現在はありませんが、今から135年前に立田山のところ、現在のリデル・ライト養護施設のあるところに設立されたハンセン病の専門の病院です。この回春病院の院長として30年勤めた方がわたしたちの教会の長老三宅俊輔という医師です。当時はハンセン病に対する差別は凄まじいものがありました。先ほども申しました「天刑病」と言われ、患者はいわれのない差別を受けた。そういう中で本妙寺の参道のところに集まる患者たちのために医療活動を始めたのがハンナ・リデルです。リデルはこの回春病院について述べています。「回春」というのは望みを回復するという意味だと。「患者たちは天刑病という名のもとに世間の人々から排斥され、虐待されておりましたから、この世には望みはないと思っている。けれどもわたしは患者たちに自分も等しく大いなる父の手につかまれている子どもであって、病いにおかされてはいましても魂は少しも人類と異なることはない。決して恥ずかしいことはないことを知らしめ、この世においても希望を起し、来たらんとする未来においても大いなる希望に生きることができるようにと、回春病院という名をつけた」と書いています。希望を回復する。病いの中で希望を持つ。それは信仰がなせる業です。リデルは「身体は病いに冒されても、魂は少しも人類と異なることはない」と述べています。体は病んでも魂は健やかである。そこに聖書の示す本当の癒し、救いがあるのです。